

しんらん講座に
参加して
みんなの声



＊唯信・唯除

▼親鸞聖人が本願成就文にも、唯除の文をしつかりと読み取っておられるお話を聞いて、「唯除」は「唯信」と同じぐらいのおもさがあると思いました。

▼「唯信」「唯除」のお話を聞いて、生きやすい気がしました。

＊無仏・浄土

▼無仏の世に生きていることが罪悪だというお話は初めて聞いた。すごく難しいと思った。

▼私には今まさに無仏の時であるという自覚がない。

▼私は仏を自分の外において対象化しているようだ。自分が…、私が…、というところに立っている。自我の私が主体となっていては、仏がはたらいにくさることはない。しかしそのことに何の危機感も罪悪感もないというのが、私の今の姿だ。

▼浄土を願えない罪の世界にいる。これは罪悪深重の凡夫の根深さによる故か。

▼「共存」「響存」というあり方を、これから自分が生きていく中で考えていきたい。

＊差別・弥陀羅

▼部落差別、インドのカースト、黒人、ユダヤ、パレスチナ問題と多くの深く悲しい問題がある。無三悪趣の願は私人の問題ですね。

▼弥陀羅・共命鳥だけで

もう二回の時間が欲しかった。じっくり考えながらお聞きしたい。

＊機の深信

▼迷いから抜け出すことができないう罪悪深重の私は、機の深信を欠き、傷つく人間の顔が見えずに、悲しみ苦しみの問いかけをどう受けとめるのか定かではありません。ただ、宗祖の信心への問いかけの「きびしさ」を共有することで、人間としての限らない慈愛と深い知恵を感じる事ができます。分かったつもりでいた自分に気付かせていただきました。

＊感想

▼ハンセン病療養所が場所の記憶としてあり続けるように、是弥陀羅も言葉の記憶として差別を問い続ける、そのことに私が鈍感でいることに、深い違和感を覚えています。無仏の世が闇夜である



ことを教える仏のはたらきがあったはず、どこまでも自力の私を越えられないでいる事に、呻吟し続けます。

＊紙面の都合で、すべてのご意見やご感想にお答えできないことをお詫びします。

「双方向参加型」という新しい形での講座全四回が終わりまりました。たくさんの方がアンケートをお寄せくださり、当初の願いであった「参加者と講師との対話が生まれ、対話を通して学びを深める講座」に近づけたのではないのでしょうか。また編集委員として皆様のご意見に触れさせていただくことを通して、自分自身の聴聞の姿勢を問い直す機会を得たことは大変有難いことでした。(F)

次年度

しんらん講座

開催予定

講師 訓覇浩師

①九月二十八日(火)

②十一月十八日(木)

会場 五村別院

③三月十五日(火)

④五月十七日(火)

会場 長浜別院

＊講題・テーマは、後日改めてポスター・フライヤー等でお知らせいたします。



VOL.4

発行所：長浜・五村別院
長浜市元浜町32-9
代表者 宮戸 弘
編集：両別院教化推進委員会
お問い合わせ：
長浜：0749(62)0054
五村：0749(73)3133
FAX：0749(62)0754
MAIL：shinran.lect@gmail.com



講師・訓覇浩氏

第四講要約(六月十五日)
①前回の講座より

三月から始まりましたこのしんらん講座は、双方向の学びという事で、最初にできあがった四回目までの内容を順次お話しするのではなく、毎回皆さまのアンケートやスタッフの方との反省会などのご意見をいただきながら、次にお話しする内容を私なりに構想していくという形でした。

そういう中で毎回丁寧な感想をいただいている方が「話を聞いたりアンケートに記入したりしながら、自分の仏法に対する受け取り方について振り返っている」という事を記してくださいました。その思いを的確に受けとめているかはわかりませんが、率直に有難い感想だと感じました。こういう講座は、参加

いただく事で、役に立つ事や、知識を得たりという事ではなく、それぞれに、それこそお互いが自分を振り返る、自分と仏法との関わりを問い直す、そういう縁が与えられるという事が最も基底の部分にある事な

のではないかと考えております。私自身がそのまま「同感です」とお答えしたいと思えます。

また、前回私がご紹介した言葉に対するご指摘を一ついただきました。大変大きな問題ですので、ここで結論的な事はとも申しあげられませんが、言葉を俎上にあげた以上、最低限の私なりの受け止めをお話ししなければならぬと思えますので、少しだけ時間をいただきます。

それは、資料の中にあげさせていただいた親鸞聖人の「本願毀滅のともがら」の「生盲闡提となつたり大地微塵劫をへてながく三

途にせずむなり」というご和讃にある「生盲闡提」という言葉についてです。

この言葉は、親鸞聖人自身も左訓で明示になっており「うまれてよりめしいたるもの」「つまり、目の見えない人を想起する言葉で、その言葉が「闡提」すなわち「ほとけになりかたし」という言葉に重ねられております。

そこには、親鸞聖人がどのようなお心でこの言葉を使われたのかとか、その時代の持つ縛りとか、その克服の道筋についても様々な問題があり、皆さまもご承知のように、現在大谷派が部落解放運動を闘う方たちから、厳しい問題提起を受けている『観無量寿経』「序分」にある「是弥陀羅」という言葉の問題も含め、本当に向き合っていないかなければならない問題です。

従ってここでのQ&Aのような形でお答えできるもの

では当然ありません。ただ、一つだけ確認しておかなければならない事は、曾我量深先生のお言葉を借りれば「(F)の言葉によって著しく傷つけられるお方々が現実にあるという事に思い至らない」という問題です。曾我先生はそのような在り方を「機の深信を欠いている」と表白してくださっておりますが、そういう自分自身である事をあらためて問い直させていただきました。

おそらく、まもなく始まる宗議会で、「是弥陀羅」問題への取り組みに対する決議が出されると思います。が、たとえそれが經典にある言葉であれ、その言葉が聞く事が堪えがたいという声に対しては、真摯に向き合い、その声を受け止め切れなかった事に対して一度きちんと謝罪をする。そしてそこから問題の克服について、様々な話し合いをしていく事が必要なのではない

いかと感じています。いつもお名前を出させていただいている廣瀬先生は、この旃陀羅という言葉で「人間自身が造り出した、人間破壊を惹起する、具体的にして根源的な差別語」と押さえられています。そのような言葉に対してあまりに鈍感な自分、そういう私が問われているのだと感じております。

前段に時間を取ってしまいました。テーマに戻していききたいと思います。

②五濁悪世の

衆生の本質

前回の最後に、濁世であるという「根拠」が、倫理や道徳ではなく、教えが人間の上にはたらくかはたらかないか、というところにおかれているというお話をいたしました。

「無仏世の衆生を、仏、これを重罪としたまえり、見仏の善根を種えざる人なり、

と。』教行信証「化身土巻

というお言葉からも頷いております。この「無仏世」という事が「劫濁」の本質であるとするなら、そこから形となつてくる「見濁、煩惱濁、衆生濁」という事も、倫理や道徳という基準で語られているのではないという事になります。こちらに引つ張られてしまいがすが、そうなたとたん「濁」は善悪の話になつてしまいません。しかし、善悪の話にした方が楽なんですね、人間の力で克服したり、諦めたりできますから。その究極が、「見濁、煩惱濁、衆生濁」をいつそうの事、自分の拠り所「帰依処」にしてしまふという事です。そんな事はいくらなんでもと思われるかもしれませんが、ここまでずっと見てきたこれらの濁が生み出す具体相に、ほとんど何の痛みも感じずに生きていけるのが私たちの姿ではないでしょう

か。まさしく、濁を濁と自覚しない生き方を普通に行っているという事です。またそのような在り方は、仏という本来の帰依所をもたないところの人間の、必然でもあるのだと思います。そういう生き方が、仏のまなざしから見れば、

「しかれば穢悪、濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る。今の時の道俗、己が分を思量せよ」

という事になるのではないのでしょうか。「僧尼の威儀を毀る」ものです。

③人間の

罪障性の確認

繰り返しますが、人間の罪障性の基準は、人間の善悪、倫理道徳ではありません。浄土を願えないという罪といつてよいと思います。つまり、仏法との関わりの中のみ、仏法に照らされたときのみ「罪」といわれるもので、社会ではいくら

この罪を犯しても、刑務所に入れられるわけではありません。しかし、この浄土を願えない罪というのは、どんな重罪判決を受けるよりも重い罪です。とても人間では背負えない、償う事のできない、慄くような「罪」です。この罪に対しても、私たちは、あまりに気軽に、緊張感のないところで、パターン化するかのよう「罪悪生死の凡夫」という事を口に出しているのではないのでしょうか。

私はその事を、「本願唯除の文」に聞かせてもらいます。ご承知のように、『大無量寿経』の第十八願は「唯除五逆 誹謗正法」という言葉で結ばれています。親鸞聖人は、このお言葉を、「尊号真像銘文」で、

「唯除五逆 誹謗正法」というのは、唯除というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせ

んとなり。このふたつのみのおもき事をしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。」

と記されております。私はここに人間が救済されていくという事の本質が記されているといただいております。全てのものを救うという如来の本願が、本願にそむくもの唯除く、という言葉で結ばれる。ここには、本願にそむくものでも救われる、とは一言も言われておりません。何か、罪の自覚が救済の条件のように受け止められる事があると思えますが、全くそういう事ではないと思います。そして本願にそむくもの唯除くと誓った本願は、本願にそむくもの唯除くと、成就するのです。親鸞聖人は、本願成就文にも、唯除の文をしつかりと読み取っております。

親鸞聖人は、この「唯

という言葉をとても大切にされます。「ただこの事ひとつという。ふたつならぶ事をきらうことばなり」と押さえられています。このような厳しい言葉で本願から除く、という事が言われています。そして、このふたつのおもき事をしめす、つまり、衆生に本願にそむくという罪の重き事を知らしめて、そしてしめす事によって一切衆生みなもれず往生する、という事を、衆生に知らしめる。衆生にとつてはごまかでも、絶対的に本願にそむくものであるという事実以外はないのです。繰り返しますが、逆説でも救われるという事ではない。

しかし、それでは、衆生は、本願と無縁な存在という事になるのでしょうか。そうではないと思います。その本願と無縁だという事実こそが、唯一の本願と衆生の接点だと思つたのです。

④五濁の世に

人として生きる

その事が、釈尊の出世本懐というところでした。ただこれではないのでしょうか。

「如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁悪時群生海 応信如来如実言」

五濁悪時群生海、すなわち無仏の世を生きるものである、という一点が仏と衆生との唯一の接点。無仏の世を生きるものであると衆生を見ぞなわした、その一点以外に、本願が人間の上にはたらく必然性は無いのだと思います。

では、その本願が人間の上にはたらくとき、逆に人間は五濁の世と無縁の存在になるのかといえば、そうではない。ざっくりと言つてしまいますが、『観無量寿経』序分の中で韋提希はこれまでたよりにしていたものすべてを投げ出し、「我いま愁憂す」「広く憂悩なき

処を説きたまえ」「濁悪世をば楽わす」と釈尊に救いを求めます。濁世を離れ、「清浄の業処を觀せしむる事を教えたまえ」と願いますが、そこで韋提希が選び取ったのは濁世を離れた清浄な土ではなく、「阿弥陀仏の所」でした。本願に酬報される土に生まれたい。濁世の衆生が存在しているという事が、仏が世に出る唯一の存在理由であるとするなら、穢土以外に本願がはたらく場所はありません。

したがって「本願に酬報される土に生まれたいと願え」という仏の願いは、そのまま浄土を本国として穢土を生きる私の誕生をもつて成就する、と言えるのではないのでしょうか。そういう私を誕生させるはたらく、それが浄土というものはたらきなのではないでしょうか。だからこそ、ごまかでも「わが祖国」といっていいのだと思います。

時間がまいりました。ここまでお話ししてきた事を、最後に一編の詩に託したいと思えます。高校生の時に出会わせてもらった、宗正元先生（二〇二〇年還浄）の「遠い道を歩もう」という詩です。仏さまの願いというものはこういうものかと、直感として最初に感じさせてもらったのがこの詩なのかなと、今も思い返しております。その詩をご紹介します。今回の講座を終わらせていただきたいと思います。有難うございました。



その人が、どんなに無知であり無能であっても、それは決してみじめな事ではない。その人が、どんなに貧乏であり、不幸のどん底に突き落とされたとしても、それは決して悲惨な事ではない。

その人の生涯に、もし悲痛な事があるとすれば、それは、

自分を信じ、人を信じる事ができないという事である。しかも、その事だけは、他に責任があるのではなく、自らの願心がになわなければならない課題である。

もし、わるい事を恐れ、よい事はかり願い求める心によって立っているならば、自らを信じ、人を信じるということも、それはよい事があるかぎりにおいてである。

わるい自分を信じ、わるい人を信じるというような事ができるはずがない。

老少善悪をえらばず、ひたすら人の身を案じ、人の身をいのる願心に帰らないかぎり、真実に自分を信じ、人を信じるよつな力は出てこない。

人生は、真実の信によって始まり、そして、結実する。その道がいかに遠くても、その遠い道を歩む身を私たちがは頂いている。

『同心』一七号
真宗寺仏教青年会編